私の日本科学者会議歴50年を振り返る

　　　　　　　　 　 　　　　　　　　 小倉　久和（日本科学者会議福井支部）

まえがき

筆者（以下 私）がJSAに参加したのは学生時代で、もう50余年になる。福井支部に転籍したのは35年ほど前で、工学部では城谷豊先生や庄野義之先生など、支部結成からの重鎮の先生方が活躍されていた時期である。私はあまり熱心な会員ではなく、『日本の科学者』は、たまに目についた記事を読むことはあっても、殆ど読んでいなかった。それでも、当時から科学者の端くれとしての気概は持っていた積りで、JSAと全く疎遠だったわけではない。本誌『福井の科学者』の福井支部結成50周年記念特大号に高木秀男担当幹事から投稿を勧められ、自分の科学者会議50年を振り返ってみようと思いついた。個人史であるが、JSAとのかかわりを中心に50年を振り返ってみた。

１．福井へ赴任するまで

(1) 学生時代JSAに誘われて（1971～1979 ）

私がJSAに参加したのは、京大の修士課程（MC）の学生だった時だ。1969年1月の東大安田講堂封鎖以降、「大学紛争」が京大にも飛んできて、その春は卒業式も入学式もなくなった中でMCへ進学した。大学紛争中は何人もの友人たちも奮闘していて、私もたまに手伝うこともあった。その中で知り合った同級生の友人からJSAを勧められて、1971年に参加した。

私は高校時代までは学業以外の本はあんまり読んでなかった。大学へ入って、小説では松本清張や夏目漱石、トルストイ、ミッチェルあるいは『三国志』『聊斎志異』など、手当たり次第に読み漁った。社会分野の本で最初に読んだのは宮本憲一『公害』である（岩波書店、既に手元になく、書籍のタイトルは分らない、『恐るべき公害』が新書で1964に出版されているが、読んだのは単行本だった気がする）。実は公害には高校時代から関心があった。そのきっかけは「四日市ぜん息」である。高校までは三重県に住んでいて、大都会名古屋へ出るときには関西線で蒸気機関車の牽引する鈍行列車に乗って行くが、四日市近くになると外気が臭くなり乗客全員が窓を降ろして閉じるのである。「四日市ぜん息」と名がついたのはもう少し経ってからだ。私の中学時代は社会科の教科書に「煙のみやこ大阪」などというキャプションの付いた写真が載っていた時代である。宮本憲一氏の本を読んで衝撃を受けた記憶がある。そのような下地があって、JSAに誘われた時にあんまり違和感なく参加できた気がする。

1965年に大学に入学して京都に住むようになった。今では想像もできないが、当時の京都の鴨川は非常に汚たなかったし、臭っていた（それでも以前よりはかなり良くなっていたらしい）。全国の河川はほとんどどこも同じで、下水に近かった気がする。蜷川虎三府知事が「憲法を暮らしの中に」の垂れ幕を掲げていた時代であった。蜷川知事は、鴨川をきれいに、と号令をかけていて、私の10年以上の京都在住時代には本当にきれいになった。1970年の蜷川選挙と呼ばれた府知事選で、「明るい民主府政をすすめる会」のビラ配布を友人の誘いで2, 3回手伝ったが、会のシンボルカラーが明るいオレンジだったのを覚えている。その後、黒田大阪府知事、美濃部都知事が次々誕生した。

(2) 高知医科大学で高知支部に（1979～1988）

1979年に友人の勧めで応募した新設医大の高知医科大学の医療情報部に採用されて助手に就くことができた（5年後に医学情報センターが設置され異動）。長かったOD（Over Doctor）浪人生活にやっと区切りを付けることができたのだった。さいわい高知医大にはJSAの会員が医師を含めて計3名在籍していて、月に1回程度のミーテイングで、大学内の情報交換や高知支部からの資料などで意見交換を行っていた。会員は分野や経験が大きく異なっていたが、個人的には面白い経験ができたと思っている。当時、高知支部事務局は高知大学本部キャンパス（市内の西外れの朝倉地区）にあった（医大は高知市の東隣りの南国市）。支部幹事会には医大からも参加して情報交換したり講演会・シンポジウムなどに参加した。

高知医大は1979年当時大学新設2年目で、私は1981年の大学病院開設に合せて医療情報コンピュータシステムを稼働させる、というプロジェクトに参画した。この企画は、京大附属病院長から高知医大へ赴任した当時の副学長・病院長（後に2代目学長）の強い願望であった。当時、日本における医療系のシステムは、検査機器のシステム化やCTなどのシステムが機器ごとに単体で稼働しており、また、事務管理系の医事会計システムも単体で稼働していた。高知医大では、病院長の要請で、米国や北欧スエーデンにおけるカルテ管理や診察・診療と連携した医療情報システムをたたき台にして、病院における医療全体の組織化・高度化・効率化を支援するための「総合医療情報システム」を構想することになった。この病院長は文部省高官と縁戚関係があったらしく（伝聞だが）、われわれの作成した医療情報システムの構想図を基に頻繁に文科省交渉を行った。当時の文部省は地方新設医大には単体の医事会計システムだけの予算しか措置しなかったが、この副学長は、破格の、京大病院や東大病院の医事会計システム並み以上の、コンピュータシステム予算を獲得して、関係者だけでなく周りの業者も驚かせた。われわれは、日本IBMのソフトウェア開発部隊の協力を得て、大学病院の開設と同時に高知医大方式の本邦初の「総合医療情報システム」を稼働させた。このシステムの稼働は日本の病院システム関係学会や医療システムの業界に衝撃を与え、全国的に大きな注目を浴びた。

当時はAppleの8ビットパソコンが出始め、ミニコン（現在は廃語、パソコンに置き換わった）が普及してきた時代で、医療・病院分野でもさまざまな利用が進みつつあった時期である。そして、診察・診療の現場まで包含した病院規模の総合的な医療情報システムが視野に入りつつあった時期である。国内でのコンピュータ関係産業は半導体をはじめ情報処理分野でも世界を席巻しつつあり、第５世代コンピュータプロジェクトなどが喧伝されていた時期であった。一緒に開発に参画していた我々メンバーにも大きな高揚感があった。しかし、日本政府や産業界・財界が1980年代初頭から強まった米国政府・産業界の圧力に屈し、1990年代半ば以降には「デジタル後進国」へなり下がった。これは、日本の政官財界の対米従属性の結果ではないか。今では、あの時の「高揚感」はどこか遠くへ行ってしまったのではないか、と思う。

２．福井へ赴任以降（1988～　）

(1) 医療情報システムをネタにして顔を売る

前書きで触れたように、35年前、1988年に福井大学に赴任して、JSA福井支部に参加した。着任早々に高知医大で開発してきた医療情報システムを中心にした原稿を書き、1990年の『福井の科学者』58号に「医療における情報化－「豊かな国」の医療のシステムと医療情報システム」というタイトルで13ページほどの論考を掲載してもらった。また、当時保険医協会に勤めておられた高木和美氏（支部会員）から声が掛かり、民間医療組織の情報化について意見交換したこともある。高木氏はその後岐阜大学に赴任されていたが、私の担当講義「医用福祉工学」で、1999年から3年間、当時注目され始めた「介護」について、3コマの集中講義を担当して頂いた。

実は私は、着任後すぐに大学の総合情報処理センターに出入りするようになって、センターの教員スタッフの一員に加えてもらった。そして、医療情報システムを中心に、センターの談話会・講演会で何回か話をしたり、センターの広報誌に紹介記事をいくつか掲載してきた。経緯は忘れたが、センターの講演会か広報誌で目にとまったかで福井県立病院の放射線科から声が掛かり、放射線部を訪問して医用画像や医療情報システムの展望について意見交換した記憶がある。日赤病院や福井医大（現 福井大医学部）の医療情報部門などにも顔を出していたことがある。

(2) 福井支部での活動

福井大学に赴任した時期は、教育学部・工学部に加えて第3学部（情報学部）の検討や、工学研究科に博士課程の設置などの改革活動の最中だった。私は福大赴任してすぐに、第3学部の検討組織の中心におられた庄野先生から、情報系だからと参加を要請された。それを嚆矢として以降退職するまで、大学改革などさまざまな「事象」に動員されたり参加したりすることになった、という経緯がある。

そんな中、たまたま1995年から2年間支部事務局長を引き受けたが、その年の年末に高速増殖原型炉「もんじゅ」の2次冷却系配管から冷却ナトリウムが漏えいする事故が発生した。支部の「原子力問題を考える会」主催で翌年8月に、もんじゅの施設が遠望できる河野村役場で、原発シンポ「JSA第22回原発全国シンポジウム」を開催した。また、2001年には2回目の事務局長を担当したが、このときは、支部結成30周年ということで、翌年3月に支部結成30周年記念シンポジウム「21世紀の地域構造と公共交通のありかた」を国際交流会館会の会議室で開催した。参加者は50名余りだったが、報道陣が20名近く来ていて驚いた。師走にはJSA福井支部30周年記念懇談会も開催され、重鎮の城谷先生など遠方から元支部会員の方々が多数参加された。

その後、支部事務局長を2003年にも担当したが、この年は、2004年の国立大学法人化までに福井医大と統合するための統合協議に参加、法人化の準備と並行して、非常に多忙だった。法人化後は大学や学部の役職や工学部・工学研究科の教育組織の再編や改組・改革などにかかわっていた。せめてこれらの経験を支部への貢献へとするため、『福井の科学者』2003年.7月の91号に論考「大学システムにおける多様性－大学統合における教育システムの意味を問う」を寄稿した。その中で、医大との統合協議で両方の教育システムが殆どそのまま並存となり改革の機会を逸したことなどを批判的に論じた。2004年96号の巻頭言「評価について考える」では法人化における大学評価について問題提起した。2010年111号の巻頭言は「文化と評価」と題したが、これは私にとって懐かしい高知市を再訪した時にたまたま入手したビラが、市の中心地「はりまや橋」界隈の事態（西武デパートが撤退、その跡にゲームなどの遊興施設設置の動き）に行政の無策を指摘・批判していた。それ寄せて、法人化後の一層厳しくなった国立大学について政治の無策を批判的に論じた。2006年の100号記念誌にも寄稿させてもらっている。

(3) 退職後の支部活動

2012年に退職したが、惰性というか、継続して担当した支部幹事として何とか活動を続けてきて、今日に至っている。2016年の初夏、支部大御所の庄野先生が逝去された。私が福大へ赴任した当初から、非常に大きな薫陶を受けた先生である。2016年の『福井の科学者』127号の追悼集に追悼文を書かせてもらった。

2017年7月から2021年6月までの4年間、JSAの機関月刊誌『日本の科学者』(JJS)の編集委員を担当した。編集委員会は会員で構成するが、当然ながらすべて兼務である。兼務の委員だけでは原稿整理や出版までの進捗状況の把握・管理などの実務が無理だから、専任の編集作業担当者が必要である。JSA本部には1名の機関誌編集専任の職員が常駐されている。私はこれまで自分の出版物や論文の版下校正はしたが、本格的な編集作業それも月刊誌の編集に直接携わったのは初めてであった。

全ての原稿は各号発行の2ヶ月前に校閲済みの完成原稿として入稿され、次の1ヶ月で版下原稿を作成して2校までを編集委員が分担して担当、3校以降完成版までは編集委員長・専任職員などが責任を持つ。そして発行1ヶ月前に最終版を印刷へ廻す。専任職員にとってはこの進捗管理が重要である。これを毎月繰り返す。各号10本以上の原稿を集めるには、特集の企画を含めて1年近く前から検討・計画しなければならないから、平の編集委員はまだしも、編集委員長や役付き編集委員、専任の担当者は、恐らく目が回る忙しさではないだろうか。この編集委員会は、2020年当初から始まったCOVID-19パンデミックで対面の編集会議が減り、地域別開催やZoomによる遠隔会議になった。現在はZoomによる会議だけではないかと案じている。新任の委員は、校閲・校正作業だけの委員になってしまうのではないか。そういえば、この支部の機関誌「福井の科学者」発行では、すべての編集作業はボランティアの編集委員長の両肩に掛かっているから、JJSの編集委員会とは異なった困難さがあるだろうと想像する。

JJSの編集委員の任務を退いた後、2021年5月から支部ニュース発行を引き受けた。6月に第1号を発行したが、その矢先、7月に益川敏英先生が逝去された。JSAと関係の深い先生で、「九条科学者の会」の呼びかけ人でもある。2021年の支部ニュース第2号に、益川先生への追悼文を掲載させてもらった。先生は2008年に素粒子クォークモデルでノーベル物理学賞を受賞された。私の大学院時代に京大へ助手で赴任され、私の同級生が先生の研究室に同居していたのでしばしば遊びに行っていた。益川先生が椅子に座って学生を相手に、研究だけでなくさまざまな話しをされていたのを思い出すが、話の内容は殆ど覚えていないのが非常に残念だ。

最後に、支部ニュースを担当している筆者から会員各位に支部ニュースへの積極的な投稿を訴えたい。支部ニュースは支部会員各位の投稿原稿が中心である。担当当初の2021～2022年の2年間は、何人かの会員が数回の寄稿からなるリーズものを寄稿して頂いたし、定期・随時に数多く寄稿して頂いた会員が何人かおられて充実した支部ニュースを発行できた。しかし、3年目の今年度2023年は、様々な事情もあって過去2年間と比べると、寄せられる原稿の数が激減してきているのが、今後の支部を考えると厳しい気がする。改めて、「日本の科学者」や「福井の科学者」の評論、時事評論や意見・見解などの紹介、活動報告・経験報告・事例紹介、行事案内・お知らせ、その他、エッセー、書評、文芸作品の紹介など、会員各位の支部ニュースへの積極的なご寄稿を期待したい。